

## 日本盲導犬総合センター

正会員 千葉 学 君

右手に富士を眺めながら山麓の疎林をしばらく進む。道沿いの小さな建物の前で右にハンドルを切り、建物をかすめて敷地に侵入すると、西日を受けた巨大な富士山が正面に飛び込んでくる。車路を50メートルほど奥に進んだ所で車を降り、富士を背に振り返るとなだらかな斜面上に小さな集落のように配された「日本盲導犬総合センター」の全景が見える。こうしたパースペクティブな感覚は建物の中に入っても質を変えて反復されているが、それは拘束された一筆書きではない、自由な散策が可能でありながらある文法で秩序だてられた、心地よいものである。また、つづら折りの構成とクサビのように入っているプロムナードによって確保された空間の冗長性は、千人規模の大イベントから犬を育てる日常のデリケートな運用まで、この建物に要請されている使い方の過酷な多様性を的確に受け止めている。機能的面でも裏動線と表動線そして犬動線がうまく整理されているほか、切り返しの部分に引退犬の空間を配するなど気の利いた演出もある。建築条件の特性を引き出しうるその場所独自の配置形式を地道に研究してきたこの設計者の力量を十分に実感できる仕上がりである。

寒冷なこの地の気候にあわせてフィックスの開口部が中心となっはいるが、風を避けられるプロムナード側には積極的に出られるなど抑制が効いた計画であり、当たり前の技術のアSEMBLではあるが環境配慮やそのメンテナビリティにもさりげない配慮がなされている。

二極化が進む現代社会、その処方のひとつとして、非政府系組織の力を社会に還流させることが強く求められているのだが、敷地の使い方、空間構成、機能配置、素材の調整など、空間の力を総動員してそうした状況を作り上げている様は見事で、これまでこの施設型が閉じていたことが俄に信じ難いほどである。管理の名の下に自閉した現代施設がもたらす公共空間の貧困化、モータリゼーションが作り出した道路際の駐車場とその奥の平板な建築という貧弱な地域の景、大仰な素振りがないために見逃しがちだが、この建築が射程に入れているのは、現代社会が抱える問題の根源でもある。空間の発明が、社会を変えることの可能性を信じさせてくれる建築であり、こうした小さな公共性の発露こそ、困難な状況に直面している我々が今必要としているものに違いない。

よって、ここに日本建築学会賞を贈るものである。